

---

# コスモス畑のお姫様

さばら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コスモス畑のお姫様

### 【Nコード】

N0546A

### 【作者名】

ちばら

### 【あらすじ】

ある秋の日曜日のコスモス畑、哀ちゃんはコスモスの花を見ながらふと遠くの空を見上げました。そこには、遠くから見守っている家族の姿があったのです。今日は、お花の前でお姫様気分になっていただきますしよう。

私は灰原哀、現在阿笠博士の家に居候して黒の組織を追っている。  
暗いことばかりの世の中には疲れたわ。

何か楽しいこと無いの？

少しは、お姫様気分を味わいたいわ。

哀「……………（もう秋が深くなったわ。空が澄んで綺麗ね。）」

金曜のお昼休みのこと、吉田さんが窓で思いにふけていた私に話しかけた。

歩美「哀ちゃん。」

哀「何、吉田さん？」

歩美「今度の日曜日にフラワーランドに行かない？今、コスモスが咲いているのよ。」

哀「うん、いいわね。ビルばかりの生活に疲れたわ。今から心にお花が咲きそうね。」

歩美「うん、うん。勉強を忘れて楽しみましょうよ。探偵団も一緒だから。」

元太「よし、俺も燃えるぜ！！」

コナン「元太、食い物のことは切り離そうぜ。」

光彦「そうですね。歩美ちゃんと灰原さんにお姫様気分を味わせてあげましょう。コスモスは女性を引き立てますよ。」

歩美「うれしい〜！！私がお姫様なんて〜！！」

哀「正直驚いたわ……………（本当はお姉ちゃんの方が似合うのに）」

コナン「……………（俺は……………花の前じゃ蘭や真由ちゃんの引き立て役だもんな。）」

日曜、夜遅くから降っていた雨が止んだ。

小鳥「チチチ．．．．!!」

哀「雨が止んでよかった。お花は喜んで私を待っているわ。」

阿笠「哀君、早く来んか。みんなが待つとるぞ!!」

哀「はい、今行くわよ。」

私が玄関から出たとき、探偵団、蘭さん、園子さん、蘭さんと園子さんの友人の明日菜さんが私を待っていた。

歩美「おはよう、哀ちゃん、博士。」

元太「灰原、表情が眠いぞ。もつと張り切って行こうぜ!!」

園子「今日は、蘭だけでなく明日菜も一緒よ。」

明日菜「蘭と園子のクラスメートの明日菜です。よろしくね。」

阿笠「びっくりしたのう。まさか、明日菜君も一緒とは。」

明日菜「園子からドラマに出ているコスモス畑の話聞いて私も行きたくなったのです。」

園子「いい男の人が私の前にやってくるといいわ!!」

蘭「園子!!哀ちゃん、今日は童心に帰りましょう。」

哀「う・うん。」

コナン「じゃあ、そろそろ行こうか。」

光彦「早く行かないと、混みますからね。」

元太「フラワーランドに向けて出発!!」

全員「おおおおお!!」

こうして、小嶋君とみんなの雄たけびと共に私達は出発した。

電車はあと少しでフラワーランドの最寄駅に着こうとしていた。

私の頭の中では、ロサンゼルスのコスモス園の光景が頭を過ぎった。

蘭「緑が多くなってきたわ。」

歩美「いよいよお花と対面できるのね。」

哀「目の前にお姉ちゃんが現れそうだわ。」

阿笠「何じゃと?」

明日菜「哀ちゃんのお姉ちゃんってどこにいるの?」

哀「別に、明日菜さんは気にしなくていいのよ。」

コナン「俺にも灰原の気持ちがよくわかるぜ。」

蘭「私も新一とアイツのご両親と行ったことがあるわよ。まるで桜のように綺麗だったわ。」

車掌「まもなく龍の森、龍の森です。」

光彦「みなさん、もうすぐ着きますよ。」

元太「それにしても降りる人が多いよな。」

コナン「まあ、白曜の晴れた日だからな。」

龍の森駅から歩くこと9分、ついにフラワーランドに着いた。

外からは花の匂いが漂い、私達を引き付けていた。

特に蘭さんと吉田さんは、すでにお姫様気分だった。

蘭「綺麗ね。今にもお姫様になりそうだわ。」

歩美「まるでおとぎ話だわ〜！！私この場所から帰りたくない〜！！」

元太「歩美の表情が元にもどってよかったぜ！！」

コナン「……………（もうとつくに気分はお姫様だよ。）」

哀「コスモスの声が聞こえてきそうだわ。あの向こうには……………」

阿笠「何じゃ、哀君？」

コナン「俺にはわかるぜ。」

園子「えっ！！」

哀「とにかくコスモスの場所へ行きましようよ。」

蘭「……………（哀ちゃんだけでなく、私にも思い出の場所ね。）」

蘭「綺麗〜！！ドラマの中の世界と同じだわ。」

園子「ドラマのラブシーンが似合うのよね〜！！」

歩美「楽園にずっといたいわ。蝶々も喜んでるわよ〜！！」

コナン「桜を見ているようで心が和むよな。」

元太「母ちゃんに見せようかな。」

光彦「元太君、花を盗っちゃだめですよ。」

明日菜「持ち帰れなくても、記憶に留めればいいのよ。」

阿笠「そうじゃな。写真に収めようか。」

哀「懐かしい。あの時のことを思い出しそうだわ。」

蘭「それにあの女性、さつきからコスモスをずっと見ているわ。」

コナン「まさか……!!」

哀「……（よく似た女性がいたわ。）。」

コスモスを眺めていた時、私の頭の中にはお姉ちゃんとコスモス畑を歩き回ったことが蘇った。

そこは、ロサンゼルスのアルフオンソフラーパークのコスモス畑だった。

その日は今日と同じで、晴れて清々しい風が吹いていた。

明美「あゝ!! たまにこうしてお花の咲く所を歩くのもいいわね。」

志保「お姉ちゃん、コスモス畑はどこなの?」

明美「左手に行けばあるわよ。もう少しだから頑張ってね。」

志保「は〜い。」

明美「……（お母さんが好きだったお花は、コスモスだったわね。お墓の前でどう伝えようかしら?）」

暫く歩いた後、私達は一面のコスモスを目の当たりにした。

そこは、私が幼い頃読んだ絵本のように美しく、蝶々や蜜蜂も飛んでいた。

志保「お母さんが行きたかった場所にそっくりだわ。天国で笑顔をを見せていそう。」

明美「綺麗〜!! 志保、ここは絵本に出たお花畑のモデルになったのよ。」

志保「よく似ているわね。心が和む本物の楽園ね。女性にカップルも家族連れも楽しそうね。」

明美「あの男性、きっと彼女に花言葉を伝えているんじゃない？」  
志保「本当だわ。女性には喜ばれる言葉ね。機械ばかりの話は疲れ  
るわ。」

明美「一層研究を辞めてお花の中で暮らそうかしら？これならお母  
さんも喜ぶわよ。」

志保「お姉ちゃん〜！！まるで、お姫様みたいじゃないの？」

志保・明美「は・は・は・は（笑）！！」

私は足元にも及ばないけど、お姉ちゃんは蘭さんや吉田さんと同じ  
で綺麗なお花が似合う“お姫様”のような女性だった。

コスモスの花で心が和んだとき、蝶々を追った一羽のうさぎが走っ  
てきた。

ジャン「……………（走）！！」

志保「お姉ちゃんウサギが走ってきたわよ。」

明美「可愛い〜！！まるでぬいぐるみみたいね。こっちおいで！！  
お〜！！よしよし（抱）！！」

ジャン「……………（笑）！！」

志保「うさぎはキューピットよ。お姉ちゃんが動物を抱く姿がお似  
合いね。お友達のペットはみんな懐いていたよね。」

明美「照れるわ、志保（笑）！！ほのぼのするじゃない？」

ウサギがお姉ちゃんから離れようとしたとき、60代後半と思われ  
る女性が歩いてきた。

彼女の名前は、スーザン・ローレンス。

わざわざ600キロ離れた遠い町からロサンゼルスフラワー園に  
駆けつけていた。

スーザン「あ〜！！」

明美「はい、何でしょうか？」

スーザン「この子は、オーナーによって放し飼いにされているの。  
子供のいない私にとっては息子同然なの。ジャン、こっちおいで。」

ジャン「……………（スーザンに抱きつく。）」  
志保「本当、人を嫌がらないわね。」

ウサギのジャンを抱いたとき、スーザンは悲しい表情を浮かべた。  
実は、彼女は末期癌で余命半年と宣告されていた。

スーザン「このジャンともコスモス畑ともあと少しでお別れだわ。」

明美「何故でしょうか？」

スーザン「私は……………、医者から癌だと宣告されあと半年も生きられないのよ。だからせめてこのコスモスだけでも目に焼き付けたいの。死んだ主人もコスモスが大好きだったわ。」

志保「私も両親もこのコスモス畑が大好きだったの。まるで童話のようだと言ってたわ。でも、見に行こうと言った矢先に事故で亡くなったの。」

スーザン「そう。あなた達にも悲しい思い出があったのね。私も胸が痛むわ。」

明美「スーザンさん。悲しんでいないで、このお花畑をゆっくり歩きましょうよ。きっとご主人も喜んでいますよ。」

スーザン「ありがとう。あなた方がいると私の心に花が咲くわ。一緒に回りましょう。」

志保「……………（まるで私のおばあちゃんのような人だわ。）」

それから時間を惜しんで、夕方までスーザンと3人でお花畑を歩き回った。

スーザン「姉と妹の3人で走り回ったのが懐かしいわ。お姫様ごっこをやった場所みたいね。あなた方もお似合いよ。」

明美「いえ……………、私はそこまでは。」

志保「私は足元にも及びません。スーザンさんがお似合いだと思います。」

スーザン「あら私が……………？本当は姉が一番だったのにな。」



明美「でも、お姫様らしさは永遠に変わらないと思いますよ。」

志保「美しさを絶やさないでね。」

スーザン「少しだけだけど、若い時に戻れてよかったわ。今日は楽しかったよ。」

明美「私達姉妹も、寂しいことばかりでした。」

スーザン「あらー!!」

志保・明美・スーザン「ふ・ふ・ふ………(笑)!!」

そして日が暮れようとしていたとき、私達はフラワーパークを出ることにした。

明美「志保、暗くなるからそろそろ帰りましょう。」

志保「うん、わかったわ。でも、コスモス畑を目に焼き付けながらゆっくり行こう。」

明美「お父さんとお母さんの声の笑顔が見えるわ。きっと明日もいい日になるわよ。」

志保「来られてよかった。また行こうね。」

明美「うん(笑)。」

しかし、その約束は結局叶わなかった。

そして、お姉ちゃんの魂はコスモスの花と共に咲いている。

哀「……………」

歩美「哀ちゃん。」

蘭「何ボーっとしていたの。」

明日菜「やっぱり会えなくなった人を懐かしんでいたのね。」

哀「誰とは言わなくても、明日菜さんの言う通りね。」

阿笠「……………」(やっぱり明美さんを思い出したんじゃろっとな)「

コナン「……………」(まあな)「

私がふと振り返ると、2羽のウサギと1匹のリスが走ってきた。

光彦「あれっ!!ウサギが走ってきましたね。」

蘭「可愛い〜!!こっちおいで!!」

歩美「ほら、怖がらないでね。」

光彦「蘭さんも歩美ちゃんも似合ってますよ。」

園子「いいな〜!!私も抱きたいな。」

元太「なに言ってるんだよ、園子姉ちゃん。肩の上にリスが乗っかっているぞ。」

園子「マジ?可愛い〜!!しっかり乗っかってね。」

コナン「……………(もう完全にお姫様だぜ。)」

哀「……………(まるで、お姉ちゃんみたい。)」

蘭さんと吉田さんがウサギを抱いた姿は、あのときのお姉ちゃんのように美しかった。

阿笠「それじゃったら、みんなで写真を撮ってもらおうか?」

スタッフ「それでしたら、お花の冠を被るとよろしいでしょうね。」

歩美「私被りたい。」

蘭「私も……………」

哀「私も被りたいわ。」

明日菜「哀ちゃん、乗り気ね。」

コナン「……………(俺は脇か?まあ今日は女性陣に主役を譲ろう。)」

そして、撮影に入った。

スタッフ「それでは撮影に入ります。」

蘭「哀ちゃん、笑ってね。」

哀「う・うん。」

スタッフ「ハイ・チーズ!!」

カメラ「パチッ!!」

スタッフ「もう一枚撮ります!!」

カメラ「パチッ!!」

スタッフ「ありがとうございました!!」

哀「楽しかったわ。それにみんな楽しかった。」

蘭・歩美「……ふ・ふ・ふ（笑）！！」

蘭「私より哀ちゃんがずっと上だったわよ。」

哀「……（お姉ちゃん）。」

コナン「……（真由ちゃん）。」

阿笠「そろそろ行こう。もう夕日が傾いとるし。」

哀「う・うん。」

元太「ふあ〜！！疲れたな！！」

コナン「元太眠くて大変だっただろう。帰ってからゆっくり寝ろよ。」

光彦「そうですね。授業中眠らないで下さいよ。」

歩美「今日は楽しかったからゆっくり休みましょう。」

園子「またロマンチックな気分味わいたいわ。」

蘭「また行こうよ、この場所へ。」

園子「うん。」

帰り道、私はずっとコスモス畑を見つめていた。

哀「……（コスモス畑を見つめる。）」

明日菜「どうしたの哀ちゃん？」

哀「……私の庭のような物よ、コスモス畑は。きっとお

姉ちゃんがまた迎えてくれるわ。」

コナン「ああ。明美さんはコスモスの花と共に咲いているのだから

ね。」

哀「そうですね。」

お姉ちゃんはこの世からいなくなっても、魂はお花畑と共に生き続

けている。

またこの楽園に行くからね。

-  
完  
-

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0546a/>

---

コスモス畑のお姫様

2010年10月15日01時14分発行